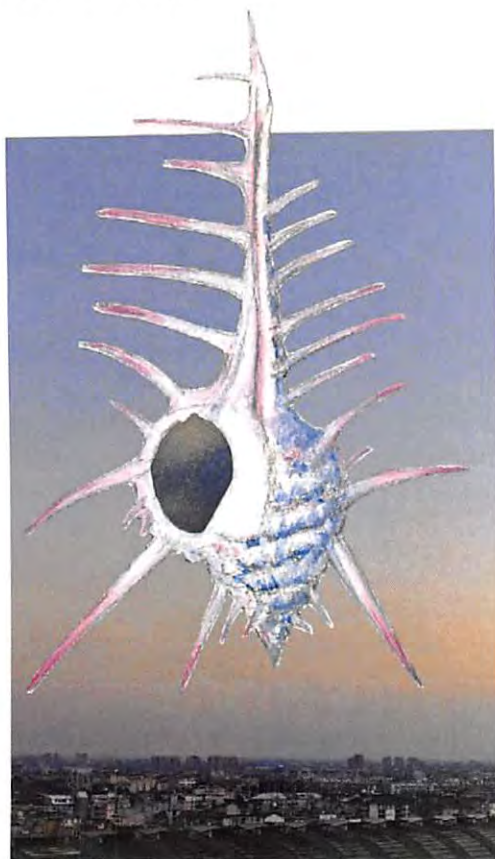


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2020. 5



令和2年5月1日発行(毎月1回1日発行)第68巻第5号

No.744

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下してまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉の精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二〇年 五月号 (通巻七四四号)

◇今月の二十首詠……山際の夕茜 山本 孟 2

■作品 [A] 小野雅子・奥田陽子他 4

A 青田不二子他 20

B 浅霧美佐子他 56

C 安藤清子他 68

A 杉山睦子他 82

■オリーブ集 泉嘉穂子・伊東ミイ子他 46

◇今月の二人 川上悠子・酒井治子 16

香川師と米田雄郎 佐久間晟 15

香川進の生きものの歌 田土成彦 15

■船田清子歌集『杳く、遙けく』批評 白子れい 36

ふたりでの旅 坂上直美

■「氷原」出版の前後 久我田鶴子 40

◇シルクロード・カフェ —— 【責任編集】 木村文子 52

私と短歌との出会い (213) 泉嘉穂子 19

■遊覧寄港 へ「金平糖」とわたし 藤澤元子 54

■歌壇月旦 時代と歌 西堤啓子 73

■三月号作品批評 74

A……小野雅子・三浦好博

光広祥子・松本多摩子

B……岩里周英・藤田しん子

C……篠原まり子

オリーブ集……養学登志子

今月の二人・作品評 久我田鶴子 18

最近の歌誌より (編集部) 99

船田清子歌集『杳く、遙けく』を読む会・記録

西堤啓子・坂上直美 55

クリップ……100

神田通信……表 3

(表紙デザイン) Tazuko Kyga

山際の夕茜

山本 孟

真夜中に高熱出でて妻は病み救急病院へ車は走る

応急の処置ほどこそど熱引かずその原因に検査入院

入院し精密検査に現はるる太腸の癌ありありと見ゆ

肝臓へすでに転移と医師はいひ手術は出来ぬあと一月とぞひと

われも子も癌の治療をさらに訊き顔見合はせて希望を捨てず

入院は続き先端医療に委ね転移の癌にも利けよと祈る

妻の病ひ思ひゐるとき六甲の山際をりしも夕茜せり

入院の妻の要る物わからずに買物袋へばさりと入れぬ

昭和七年生まれ。
大阪支社所屬。
歌集に「竹落葉道」がある。

病室に洗濯物など届けゆき「気分は」といつも同じこと訊く

食欲なくやせゆく妻が起き上がり「体にいい物食べや」と声かく

柿林檎みのりの秋を病室の妻と食うべてつながるひととき

病院へ通ふある時戸締りを不安に思ひ戻ることあり

病床に静かに眠る妻の顔黄色くなきかとまじまじと視る

病窓に夏より秋の雲映る「衣更へを」と妻は指示する

一月半入院終へて立つ厨妻の背より葱きざむ音

退院の早々妹と長電話身内二人の似た声同士

病院の生活縷縷と語りゐて妹に先輩づらする口調

退院後副作用に悩む妻の手を補ふわが手家事は順調

家事に追はれ次の家事をも考ふる妻の病む時のわが自手羽多は

寛解の妻の手料理三度三度わが体重はみるみる増せり

作品

A

小野 雅子

カウベル

・羊

感染者「ニュース」のたびに増えてゆく光の春の思ひは遠し
頼まれたこと断りぬ頼まることは嬉しき梅の咲く頃
天麩羅にせむと口々に言ひて帰る露の晝わけてもらひたる夕
エプロンの紐むすべば主婦の貌となり玉葱の皮むき始めむとす
あす朝はオムレッツにせむ冷蔵庫の卵の列を思ひつつ寝る
カウベルを鳴らして帰りゆく人よ毎日かならず六時すこし前
知らぬまにひなまつり過ぎ置き忘れしものごとくに内裏難ある

奥田 陽子

都会の川

・羊

大川の流れゆるやか緑色の水を流して暮れつつゆかん
休日の河原に遊ぶ人ちさく小さくみえて動きこまやか
歓声のとどくはずなき川向う球取る動きのすばやかにして
早朝の空を染めゆく朝焼のひろがりゆくをただに見つむる
雲切れて朝のひかりの差しきたり川の流れに映せるゆらぎ
橋下をタグボートゆくさざ波の都会の川のゆるやかさあり
松生うる社の庭を歩まんとおさな児なれの下駄きこちなく

大 浪 美 雪

二八に碇

・森

大雨だ長靴はきて傘をさし江戸深川へ出発吟行
資料館の二階より見下ろす江戸の町長屋の屋根に猫の寝転ぶ
佐賀町の長屋に貼られし〈疱瘡守〉最初に種痘を受けし人はや
江戸っ子は判じ物好き〈二八 碇〉二八わかるも碇とは何
江戸の世の稲荷鮓いなりずしむは竹の皮おみなのは貝の器に
甕灰も尿尿も売れた江戸の世に石油由来のものなどなくて
雨のなか池をへだつる対の屋に灯のいる見れば心寄りゆく

朝 井 恭 子

石 段

・森

広重も描きたるといふ手古神社高き石段に時を止める
石段の高きを見上げ息を吐く 昇りも下りも老いにはつらし
御やしろの裏庭にある小さき祠いなり学問の神祀ると老い言う
おそるおそる覗きし祠に下げありぬ「大願成就」の赤き御守り
受験期も過ぎて神社に人気絶え春の気配の深まりてゆく
庭石のかけにひっそり花咲かせ口紅水仙の紅色淡し
老いしるき一人と一匹ゆるゆると歩む路地裏はやも暮れ初む

磯田ひさ子 啄む

・森

じやのひげに二羽の雀の潜りたり潜りたるまま姿を見せず
 瑠璃色の実を啄むか潜りたる雀じやのひげをつきつき播らす
 啄むといふ習性のいちらしさ雀みづからいのちを保つ
 食べることすなはちいのち瑠璃の実は雀の洞をひととき灯す
 速くまで枯れ尽くしたる田の清し野辺へ送りし人の顔ち来る
 ゆるゆると野焼きのけむり広がりぬ人の暮らしのあな尊しよ
 読本の「八犬伝」の挿絵より人を容れたる山並み低し

市原志郎

ウイルス

・萬

ウイルスのさばりている街の中今日も敬遠して外には出でず
 今宵また意味なきテレビ見ておりぬ妻とけらけら笑いながらに
 新型ウイルス無視せんと思いつつ寝る今日一日を
 思うように動かぬ頭抱えつつ寝たまま一日終わりてしまふ
 嫌な事すべて忘れてしまわんと今日一日をうとうととする
 お笑いを見つつ過ぎたる一日がありて寂しよ……いく日か
 老人というレットテルを張られつつ昨日も今日もそして明日も

市原やよひ

霧の朝

・萬

嫩梅も梅も木瓜も咲いている農家を過ぎて我が家に着けり
 太陽が白い月の様に浮かびいる霧の朝をこみ出しに行く
 霧分けてごみの袋持ち行けばしばし物語の世界の中に
 雪のなきまま過ぎて行く庭先に今を盛りと雪柳咲く
 パンジーの花の色つや増し来たり本当の春になりたる証
 まだ固き桃の蕾と桜餅土鈴のひなの前に置きたり
 ようやくに見つけしマスク子に渡す満員電車の通勤なれば

神田鈴子

コロナウイルス

・大

中国に生れし廢物か目に見えぬコロナウイルスはびこりてゆく
 丁寧な手洗ひのみが予防とふ窺ひ知れぬ恐怖もたらす
 わが国に初めて死者の出でしより早や國中に飛び火してゆく
 三千人の客を抱けるクルーズ船新型肺炎に身動きならず
 たちまちに被害は世界に広がりに留まり知らぬコロナウイルス
 感染を恐るるか「全国休校」の通知は人らに衝撃与ふ
 世はまさにコロナウイルスに冒されて動きの止まる人間社会

菊地栄子

ベトナム

・灣

爆撃に穿たれし方形の水溜り年々浅くなりゆくと
 國中が焦土と化した戦ありい行くベトナムに眼裏湿る
 朴の木揺らぎ大きく風渡り集落こもる街道沿いに
 朝なさなコーヒー満つる大カップ酸味もまろやかブラックでよし
 幸せであったか側室三百人笑い返して王朝崩ぶ
 みどりなす原野に隠れる事もなし白鷺の群コントラスト映ゆ
 長きトンネル潜りゆく時日本の援助を謝せりコンダクターは

木村文子

カオルコさん

・羊

足あとのうえに足あとと重ねゆく湖までの道は凍りて
 カオルコさんと呼ばれて我は永劫の瞬間異世界に住む
 まじまじと我をみつめるその顔に覚えはあらず こめんなさいね
 水底の藻のようにゆれる記憶かも凍りし湖面を雪走りゆく
 降る雪を手のひらに受け如月のカオルコさんに我はなりたり
 藤色のオーバーの背は明るくて 誰なのですかカオルコさんは
 存在を塗り込めるように降る雪に埋もれて眠れ春が来るまで

草刈 十郎

大冬木

・世

香港の王政に屈せぬ意志のごとマスクはなさまぬ若人あまた
 深深と山眠りをり美しく美味なる水を作る山なり
 老友と酌み交はす酒その果はやがて訪れる死の話なり
 古民家の庭に立ちいる大冬木静かに樹齡重ねぬるなり
 八十を省きて九粒年の豆両手の皺で受けて食せり
 今生の別れもあらむ鳴きながら旋回しつつ鶴帰るなり
 悴む手さすりてをれば鳥の影よぎり障子に夕日射し来る

國井 節子

人の恋しき

・春

風渡る池の回りのさくら花いつか何時かと人待つに似て
 今すこし生きてこの世の花を見むるさとの花吉野のさくら
 墨磨りて肩の力をほぐし書く八十の手習ひ筆にまかせて
 秋篠の川逆のぼる鯉の群れゆくも行かぬも己がペースで
 東塔の落慶法要四月中招待さるるも邪魔する病魔
 一人居に馴れし二月の庭に咲く今年の木瓜の花のあかるさ
 二人して植ゑたる八重の梅の木の見上ぐるばかり人の恋しき

河野 繁子

如月

・雁

おおいぬ座こいぬ座オリオン結びたる冬の大三角仰ぎて冷ゆる
 真夜中に覚めてテレビはギアナ高地ミミカ草生いハチドリ飛べり
 冬至すぎ朝日の昇る位置かわり櫛の裸木真っ赤に染むる
 もじゃもじゃのヒゴタイの種土を割り双葉なれども春の一員
 葉の枯れて新芽はすでに用意されトウテイランの春待つばかり
 いつになく美しき紅梅満開にも静かなるオオジュリン二羽
 「地中海」のホームページでわが歌を読むと感想などを送り来

小西 美智子

校庭

・大

子らの声すずしくひびく校庭にいまも建ちいる金次郎の像
 人かげのなき校庭にしろじろと辛夷の花はひそかに咲けり
 新型のウィルスを避け休校の「和みの学舎」の表示の哀し
 公園の日だまりに子らはあまた群る臨時休校つづく三日目
 中原街道より久品仏への道しるべみちびかれゆきし人のいくたり
 浅き池水に蝌蚪の生まれ泳ぎいしあの境内にも行かずなりたり
 武蔵野のおもかげしのばせ茂りいる樺は五階建てマンションを超ゆ

小林 能子

起き上り小法師

・羊

「認知症保険」を勧められてをりおやおやと思ひなるほどと思ふ
 古雛に代はるあれこれ思ひ出の花見山の写真、起き上り小法師
 掌てのひらに起き上り小法師あそばせて甘酒の宴といふこともある
 伸びし髪かきあげて読む友の文はげましの立雛の絵葉書
 鳩居堂の立雛の絵の華やきにふつくら粧の甘酒に酔ふ
 怠れば感覚にぶると足裏にボール転がす励まされつつ
 冬の夜の雨の恵みか電話あり友が初めて「歌集」を読むと

近藤 栄 昭

童謡

・虹

四斗樽の蓋新しくお多福屋新漬け沢庵間口狭める
 「何回目」「三回目だよ」「四百円」「五十円安い」「お得意様」は
 店先の沢庵の樽消える春八百屋の店先菜花の黄色
 蒸し缶に残り糸引く鉛洗う吊りかこの芋空っ風ゆらす
 九時集合揃いのエプロン三角巾無料昼食今日はポランティア
 大根の多いおでんの無料メニュー寂しみつ切る吾の役割
 三組の子供を迎れしお客様無料の昼食に童謡を流す

近藤芳仙

ローマにて(二)

・信

梅干のやうにオリブ食む友とローマの朝日浴びて安けし
ホテルよりほんの数分二千年前のローマが共存してゐる
アイバットの地図を示して片言の我らに現地の人らやさしき
案内すとローマ大学学生の親切日本に來たら返さむ
街中に配備される軍人のもたらす緊張日本にはなき
遺跡群をゆきかふ人らは多民族我らも黄色人種の一人
テルミニの駅中にあるレストランバイキングなれば我が胃にやさし

坂上直美

夫病む

・天

春の午後いと穏やかに過ぎゆけば君が入院そらごとと思ふ
春霞幽明境を異にする覚悟をせよと言われても否
これの世に君のなさねばならぬことありけり一つ吾を送ること
君が行く死出の小徑を断ち切らん我が手に天の火は持たずとも
君が母老いひとり住む故郷に帰らば辛し帰らねば憂し
君が身に菓食う病魔を吾に分けよ一分を半ばを九割九分を
いつの日か二人の旅のふとした間君病みし日を笑い飛ばさん

坂出裕子

幸

・洛

新年の何よりの幸ながらへてウインフィルの楽の音を聴く
すこやかに生きてことしも会はむと希ひをりたりこの光景に
美しく光る楽器に美しく奏でられる音色たのしき
寶石のレースのやうなシャンデリアあんなきれいなものがこの世に
もはや訪ふことはなからむ外つ国のあの建物をあかずみつむる
つつがなくいのちながらへたりし幸かみしめてをり美しき音色に
神様に給ふひととき一年にひとたび出会ふ夢の世界の

佐久間 晟

日乗(三二)

・湾

花も空も皆美しくひろがれど見つめるはただ未来のみかも
こころ深く見つめるほどに見えてくるはわが人生の欠落のみが
如何にせんこの欠落を埋めん既に卒寿を過ぎたる今は
しかし待て心は常に美しく生きて来しゆえ悔いは在らざり
なにゆえに今もこれ程師を思うそわが裡に生きて居る故か
思おえば二十歳の頃から五十年常に身近に在りしわが師よ
今はもう抛るべきものは何もなく抛られる身なるか心強くせよ

佐藤道子

耳なり

・甲

愛用のカップは掛替へ無きものと毀さぬやうにやさしく拭ふ
時経れどまだうべなへぬままの日々熱きはうじ茶今朝は供ふる
日向はこの夫に歌ひし早春賦春待ちわびし頃のなつかし
耳なりの何時よりか我にまつはりぬ優しき鈴を亡夫が鳴らせり
毎朝の散歩に亡夫がついて来る今日も耳なり聞きつつ歩む
寝坊して短きベルに起される亡夫が散歩の催促なせる
一本のこぼれ水仙陽に耀ふ夫かと思ふその清らかさ

椎名恒治

新型コロナナ

・橋

新型コロナナ聞かぬ日ありて眼下の校庭に子らの影なし
桜門の並木に消毒の霧舞ひをりて桜の花のひらく日近し
いづこより帰しならむランドセルお揃ひの子がエレベーターに乗る
選抜野球中止となれり練習のユニフォームの姿見ざりこの春
病床にて甲子園国技館を樂しむし小泉さん亡し春待たずして
週二日のデイサービスにわれ運ばれて指体操に難渋せり
九月二十日われの誕生日にてことなく九十六回過ぐ

鈴木結志 六花

・福

朝明けの六花らんまんわが里は雪の都にさまがわりしぬ
この世とは思えぬ六花咲き満ちて目よりたしかむ五感をひらく
ありふれの風景変える一夜雪生きの歴史の中に美を生む
生き星の生物なべて静もるか六花らんまん視界白無垢
科学者の目は如何に見る白無垢の六花にそそぐ天のひかりを
天暗く降る雪の数如何によむシミュレーターの算この目に見たき
無垢界は無窮のきわみ妻の世をこの世に映す輻射のひかり

関根榮子

・焦り

・崎

節分の豆多過ぎててもあそぶ年齢の十分の一にせよとぞ
朝食の卓上の日射しは立春と思えばきぞより明るき光り
張り替えし障子に透ける松葉柄風つよき庭の落葉もよぎる
椋鳥の番か日頃早咲きの椿に來ては蜜吸いて去る

会場の公民館へ赴けば集まりは我々の一つになりており
受話器置き無然とする夫宴会の中止の知らせをポツリと言えり
マスクせぬわれの目立つか早々にシヨッピングモールを出で來し

関根和美

・囃(おとり)

・崎

屋根裏のどすんどすんの音の主あらいぐま今日あみにかかりぬ
あんドーナツバナナにキャラメルコーンなど囃かえつつひと月がほど
甘党の夫惜しむらく囃には蟻群れなすも獲物かからず

かかりたる二匹は猫ぞあらいぐま賢きものよとほめるもおかし
期待せず忘れいるころ成就するそんなものかも知れぬこの世は
暴れすぎ疲れたるらん赤き腹みせてぐったり寝るあらいぐま
しんみりと義父の亡骸まもる夜に天より轟音 正体はこれ

高尾恭子

・小春日

・大

洗濯はパンツ五枚とシャツ一枚それでいいのだ母の小春日
カナリヤは歌を忘れて翔びたちぬ母のピアノをぼんとひびかせ
銀色の月夜の海を漕ぎ出でよ洗濯手順をわすれし母は
ためこんだ蜜柑の皮の背カビがつぶやいている「もういいってば」
木戸たたく寒の夜風よ湯上がりの足にクリームたっぷり塗る
いもうとを先に送りし年の暮れ母は無口な童女になりぬ
わたくしに遣せるだろうかダイヤモンドダストきらめく白鳥の歌

高津砂千子

・たより

・風

咲き満つる枝垂れ紅梅揺らせるは目白のあいさつ今朝も律儀に
手袋を使わず過ぎし暖冬をあやぶむ声のいずくともなく
たぶりのガーゼ合わせて作りたるマスクは頬にたやすくなじむ
鶯の笹鳴き聞こゆウイルスのニュースのがれて庭に降りれば
少しずつ体調戻るといふ便り友のあかるき顔うかびくる
故障せしミシン自力で直したり四年ぶりなる何を縫おうか
毎月のたよりに知れる友なれど電話の声は何にも勝る

滝田靖子

・未練

・新

働き方改革つてどこの話だらう日日の残業ますます増える
一年に六人のナースが退職する病棟にどんな明日があらう
看護師の不足は残業に補ふと決めしか求人広告も出す

今晩はカレーがいいなと言ひかける耳にカレーにしようと言ふ声
テレビ見て本読んで少し昼寝して過ぎる一日を極上と言ふ
まだ固き桜の蕾に触れてみる深き死などわたしにあらうか
残しゆく者への未練たらたらに死なうわたしはほんやり生きて

田土成彦 霜天

・宙

川霧の狭霧のかぎりつつみるる橋わたりゆく一期一会に
動かなくなつたクレーンが霜天に高々とかがく赤色灯を
冷蔵庫にしまへる米を取り出でて飯炊く三日ぶりの三合
牽かれ行く犬がいよいよ付いてゆく主の機嫌損ねないやう
黎明に影を濃くする高層ビルあるいはバーチャルリアリティーかと
借りてきた三冊の一冊だけは読み返却に行く二週間後に
ウルトラマン大きくなつて五〇トン ナガスクジラは一五〇トン

田土才恵 紀泉アルプス

・宙

一月の風に押されて決意しぬ登山なるもの初挑戦へ
登り坂はやも息切れ苦しめど引き返すとも言えず喘ぎぬ
背後より声をかけられ励まされ三角点を踏みしこの足
登山靴履けばそれだけ上がる土気われをささえて五時間は過ぐ
アップダウン尾根道をゆく時の間を見え隠れして海峡の青
海峡に午後の日射せば反射光眩しみ下る尾根の坂道
自信など皆無なれども憧れは余生思えば決意に変わる

玉井綾子 学級閉鎖

・羊

明日から三日学級閉鎖とのメールを社食で咀嚼しつつ見る
「三年三組が学級閉鎖」へ……へいじゃないうちの子供のクラスノ
閉め切つた教室の中、生徒らの汗と唾液で肥立つウィルス
元気な子の学級閉鎖の無念さが教室の音を全て没する
年度末の学級閉鎖は学校に行きたい気持ちの子に縫い付ける
三組の学級閉鎖解かれてもうちに遊びに来ぬ二組の子
二〇二〇年令和二年二月二十二日新聞の日付二度見す

虎谷信子 拾遺

・伴

芹川の若葉しづくに 濡れ行てば、人恋ひそめし 頃のことはも
芹川の古木の肌に 触れてみむ。へっせ語りし君は 遠しも
白壁の剝れを ついばみるし鳥の、とび立ち椿の花群に 入る
背戸庭に ここだ花もつ玉すだれ。夕べはかくも 萎みてやまぬ
人恋はぬ心渴きは 季うつる、朝の光に 消されてあれよ
絹の衣は 肌こそひきてほのかなり。薄着となりて今朝を足らへり
白髪に 堆朱櫛さす、よそほひといふにあらねど 心安らふ

中島央子 十まり三人

・森

戦争を経ながらへしクラス会卒寿の仲間十まり三人
次の会ひ白寿と意気ごみハモリたり「鏡と見する田子の浦波」
高齢のすすむわが家の電波時計嵐の夜更け大安しめす
冷ゆる夜の寝しなの一 口蕎麦猪口に「新潟景虎」の甘酒する
折合ひをつけて生き来し一世かと柏の甘酒両手に囲む
歳々の逢ひと別れのすきゆきに昭和四年巳年いくたり
カレンダーに外出予定しるし終へ贈呈歌集のページを捲る

中島義雄 マスク

・岡

恥づるなきわが生きとのみ言ひ得ねど春降る雪に 喉を覆ふ
淡雪に静まりはてし夜の間に満開の筈の梅が匂はず
雪に濡れしマスクずらして札するは昨日の歌会に同席の人
残業つづく孫に鯛焼き買ひやらむマスク直して後尾に並ぶ
夜の雪に簡潔の生きを曝しきて解くネクタイが手に軋むなり
マスクに溜まる雪は忽ち融けて雫き儂き矜持は咳にまぎらす
冷えつるの耳を敷きつつ眠らむか涙ぐみたるドラマ忘れて

永塚節子

予定外

・銀

駅前の人ごみ逃がれ入りたるカフェに並ぶ小さきテーブル
レトロなる曲の流るる店の内話しこむ人本を読む人

予定外の時間うれしも小さなるカフェにゆるりウインナーコーヒー
高架走る電車の音の聞こえるも店の中は別なる空間

哀愁を帯びて流るる絃の音この空間を包むごとくに
身のうちを充たしくるもの来し方にこんな時間のあつただろうか
今少し螺子を巻くのは止めておくこの一杯を飲み終るまで

萩 葉子

豆腐

・銀

紙懷炉大小三つ揃えおく寒さつづきの約束前日

五街道の宿場のあちこち話しつつ「二十五年めよ」と四人のひとり
一日がはじまる 鳥の声車の発進音戸を開ける音

子供頃の豆腐屋によもやデパートでめぐりあうとは

水の中でゆらっとした豆腐をすくうおばさんを思い出した
少し早く着いた神田駅 ホットミルクにて息ととのえる

太りぎみの猫がゆっくり横切りぬガラス戸こしのわれを振り向き

白子 れい

鬼は内

・洛

内々にわが身の始末もおれど確たる方法いまだうかばず
胸内の聞ききくるる友の逝き夫まつ墓に今日も佇む

「福は内鬼は内」とぞ豆撒きぬ独りの節分鬼なりと来よ

明けやらぬ空を仰ぐも月あらず星もあらざり春立つ朝

右ひだり樹々の枝かざる雪の華みつ茶席へ歩みはやむる
茶席へとこころの急ぐ坂のみささやくとく雪の舞いくる

立春をすぎての雪のふんわりと心を揺らすこころを充たす

ばばりょうこ

騙す

・鹿

水槽の小さき魚と目が合いぬボールペンの先のほどの一点
汝も愁うことありしやとつぶやきて我が高慢に傷つていて

病院はどこもいっばいお互いに傷なめ合いて得心の顔
辛口も甘口かたやひより見もエレベーターにのみこまれゆく

饒舌で埋めつくされた一枚の余白で飛行機とばしてあそぶ
すでに賽は投げられたれど決意と確かさの行く方誰も知らない
何はさておき我が身を騙しとおさねばカーテンコールのベル鳴りたるを

浜谷 久子

一草

・地

吹き出だす矢車草の畑いちめん羽化の一粒はいちぢ一草として

白磁とも光る胚芽の米そそぐ尖りを壊さないようそっと
落味噌の春の苦さをかみしめる眠るままではずまぬと季は

春陽ざし土を起こして芽を誘う鎌も不要と雨水のころは

靴の中の小石が止める早足を立ち止まることいつでも出来る
沈黙は冬越え春越え蟻螂の卵は軒下張り付く枝切れ

卵鞘の断熱材は寒の間を守り続けるいのち蟻螂

浜本 芙美

あるがままに

・夢

人生の晩年を生きるわれら二人日々なるままにあるがままに
お隣りの若者の家建築の槌音睦月の空へひびきぬ

冬には冬の雲の色あり感動も感情さえも淡くなりゆく
その昔野でありたりし証かな歩道のきわの薄ひとむら

昔のよすがしかと伝えるひと群の薄のかたえを今日も往き来す
服装をみれば人柄わかるとう昔の理念くつがえさるる

「言葉は絵になる香りです」つぶやきながら素材とむきあう

檜垣美保子 音

丘の上のしらうめの花満開をみればすでにし散り敷くはなびら
 求愛のこえなわばりをしめすこえ野鳥の会の人のいう声
 大屋根は夜来の雨にぬれており朝のひかりをのせてかがやく
 風のなく棕櫚竹の葉に音のなくははの起床の音待ちており
 ひとひらの雪ふたひらの雪きたりそののち降らず夢かもしれぬ
 ひとのことおもえばゆたかにさざなみにつつまること灯明の揺れ
 自転車のギアチェンジあえて重くして駅前大橋までの急坂

福田庸子 冬の刻

没りつ日の位置は日毎に移りけりしづかに冬の刻すきてゆく
 テレビニュースの音声大きく届ききて今朝もたしかに母は生きをり
 ささやかに抵抗ひとつ貫ける電子レンジを置かざるたつき
 五十年前の料理読本かたはらにレンジに頼らぬ一品を探る
 天誅と呼ぶべき肺炎にコウモリが一党支配を崩してゆくか
 情報を隠す支配は露見せりコロナウイルスまきちらす国
 春節の北京大通りに人あらず一党支配きはまりゆけり

藤田美智子 潮風

眼裏に翼の白が冴えてゆく北を指すこゑ床に聞きつつ
 源流を探し求めてゆくやうに君は何度も〈そもそも〉と言ふ
 喪失をひそかに怖れるならむ子はいくつもの忌み言葉もつ
 口にするほどの寂しさぢやないけれどしやらんしやらんと桐の実が鳴る
 根の傷み知りて覚悟をせしごとくパキラは自ら葉を落としくゆく
 悔しさに唇噛むことのなき日日に歩く速度もゆるくなりたり
 聖火リレーのルートは復興の見せ場なり急造の街を撫でる潮風

・ 昂

藤森巳行 電車

週末も電車乗る人少なくてコロナウイルス混雑緩和す
 こげ茶色の電車が荒川渡り行く「キューポラのある町」映画のシーン
 葬式の導師を終へて礼をする会葬者全員マスクしてをり
 金持ちになつた夢見る札束を金庫に納め目を覚ましてたり
 良い言葉探し求めてラジオ聴く私の短歌に詠み込みたくて
 年号は令和にかはれど葉の花は一生懸命今年も咲けり
 ふる里の畑一面に咲いてゐた葉の花今も心に残る

船田清子 帰り道

批評会帰りの道を沈丁花のかをり伴ひ「よかつたね」と君
 いざ行かむ君とたづさへ夢の間を箱根湯本の湯治場めざし
 曾孫より呼べばわが嫁「バーバ」にてわれはその上「グランマー」とぞ
 その上のわが母は「大グランマー」写真の前にて曾孫マゴ、マゴ
 落葉松よ雪を払ひて細枝なすみどりのトレモロはや奏でなむ
 九州の鉄輪温泉湯治場も多しと聞けば心騒だつ
 「鉄輪」といへば謡曲火の灯る鉄の輪頭にをみなのがき

・ 天

牧 雄彦 蠟梅

蠟梅のひと枝差せるガラス瓶厨の窓辺に春ひそみある
 摒越しに蠟梅の花咲くが見ゆここにはゆかしき人が住みあるむ
 摒越しに蠟梅咲ける道をゆく何か幸せな心地きざして
 蠟梅の咲きたる小さき家の庭そこにかすかな春の声きく
 蠟梅のほのかに香る道を過ぐとほくに病める人おもひつつ
 蠟梅を過ぎて下れば川岸にせんだんの実が夕風に揺る
 蠟梅の季節は過ぎて夕空に白き半月浮かびて寒し

・ 大

・ 銀

松浦禎子 依代

・羊

山上の白毫寺までは杖が欲し今日はあきらめふもとより拝す
道ひとつ越えしところに奈良公園そのただ中に弥生さん住む
盛んなるキウイの棚の影ゆるる今日の縁側二人のために

高畑は神の依代今に生き白髪ふるう人の手をとる

大楠の木下に在ます鏡神社松皮の屋根にえにしを結ぶ

高畑に住む弥生さん安かれと春日の山の身めぐり拝す

大和三山眺めよと指す畑中の草生の道のそのはての空

松永智子 空

・嵐

音のなき空仰ぎたりきさらき 星ふる夜のただただとほし
まぎれなくことば褪せたり星の夜のにこりなき闇かなしみをよぶ
きさらぎの夜のふけにけりひとのこゑ星ふる空の闇はるかなり
星の空高くしとほし音のなくきさらぎの夜ふけゆくはやし
星のふるひびきさながらかなしむにことばゆれつつきさらぎ終る
星のなき空仰ぎたりきさらぎのかけあはあはと褪せゆくをみる
にこりなき星の光のとほくしてまぎれのあらず夜のきさらき

三浦好博

ピノキオ度

・銚

福寿草の咲く地を訊くに福寿荘老人ホームはあの丘の上

新築の祝ひ弾めど子の一家潔癖症で親でも泊めず

我が家にも泊まらず我らも新宅に泊めず嫁は九年沈黙

愛なくば人を見ることできざるに何を学びし看護師の嫁

七色は七人の女神雨上がりの水溜まりに見てひとを思ふも

二―一四「星の王子」が来たりけり「大切なものは目に見えるなり」

可愛さうな桜に貶めたるは誰ファクトチェックのピノキオ度四

三木まり 更紗

・昴

つくし摘む幼なの丸い爪先に生れたての若菜いのちが匂う
生れたての若草を踏み幼な児はぬかるむ畔をおそるおそると
雲は無くましろな三日月くつきりと明けやらぬ空の春まだ浅い
輪郭の鋭い日月掛かる空蒼々として鳥還りゆく

北へ還る鳥の群れは整然と山の尾根超え夜の闇を超え

銀いろの光を放ちその一機西へ西へと 尾を長く曳く

春浅いもどり寒波の風強く更紗木蓮みな北を指す

宮本靖彦

コロナウイルス

・凌

八割がマスクを掛くるこの車内早春の日がさんさんと射す
長江に建つ黄鶴樓しのぶれば観ひし疫病ひたひたと増ゆ
ウイルスに閉ぢ込められて庭草を抜けば侘助慰めくるる
予定行事みなウイルスに邪魔をされ万葉集読めば春の雨降る
コロナなるやさしき名前持つ病マスクに曇る眼鏡に歩む
紹興のホテルの庭の大葉三極もらひ育てて早や三十年
咲く花はレモンの薫り迎春花と呼びし彼の地も満開ならむ

三好聖三

田舎日常

・伊

啓蟄を前に現る糞蛙道に重なり塀に重なる

じゃが芋が未だ眠れる畑中におおき獣の足跡がある

土おこし終えれば忽ちあらわれて虫を啄むイソヒヨドリは

添水鳴る寺の廊下に娘は坐り父は微睡む手枕のうえ

おもむろに寒天橋に坐りつつ黄葉をはつか掲げる母は

天城路の幽霊譚を語る時隧道に娘等にわかにさやく

この国の思惑などに関わらず桜は桜の理に咲く

「陸軍が何かしたらしい今夜は帰れぬ」海軍義父より義母への電話
 歴史的電話なりけむ夫を案じ子を護り家を護りし若き義母はも
 海軍の主計大佐にありたれば軍港軍港の計理を監し義父
 姑のみの舅にありけむ年々に九段の舅にひとり詣でし
 この三日探しあぐねし言葉一つ真夜起き出だし書く「カタルシス」
 幾そ度春巡りしや重花かく優しくも紫匂ふ
 亡き夫の表札掛け置き八年か今も夫に護られ暮らす

茂木

斌

春はバイカラ

アイヌ語に春はバイカラ夏をサク山をヌプリと覚えて忘る
 「ミチクサ先生」連載中の作者倒るクモ膜下出血とぞ回復願ふ
 海側の車窓にうつる鳶の影翼を風に乗せて輪を描く
 廃校跡のうどんの体験交流館煙突は薪ストーブの背き煙吐く
 さま交はる給馬の願ひよびつくりす「ピンク映画にまた出たいです」
 降車駅までの二時間 半分は読書に後は居眠りに着く
 この一月ほやほやの傘寿になりましたただの犂老と生かされ生きる

もとむらしげと

白杖の人

車椅子を押され入りゆく人のあり川の畔の義肢製作所
 公園に繁りたる樹が一瞬に揺れてなかり鳥が翔びたつ
 駐車場に光あふれて駐まりたる屋根にも窓にも光が跳ぬる
 白杖の人に手を添え渡りゆきし少女は風となりて駆けゆく
 おのずから偏りているもの多し夜の公園の無人のシーソー
 細やかな圧力なりとも与えじと生ききて人と疎く生きおり
 半世紀前の自分が見つめおり母校の子らの講演会に来て

八乙女由朗

コンビニ店内あるくおのれの風体は食材探すけものに似るや
 なんてまあ誘い上手に置くものかコンビニ通路に目立つ甘酒
 剪定をなさぬは籠むる思いあり防風林となりて立つべし
 手を振りてデイサービスへ運ばるる妻のしぐさは悲しきものを
 ウイルスとう見えぬ悪玉が人の世を統べんとしおり緩みたる世を
 雷鳴を怖れし祖母は雨戸少しあけて線香を灯して居りき
 津波より逃るる時の「てんでんこ」用い向かわん離怖畏祈りて

山下雅子

踏みしむ

こまやかに病状伝うる卒寿の声若き日の冴えありありひびく
 飲み止しの湯呑みそのまま卓の上に帰り来て独り安らぎにあり
 「あらまた出てしまったの」だってママ自動なんだよ」四歳の児は
 とんぼ柄の母の浴衣は初孫の襦袢となりて夏空舞いき
 黄箱入りの煙草「バット」は癌末期の父の唯一好みしけむり
 腰丸き老女と青年リハビリ士腕組み歩く一二一二と
 リハビリ士と歩行は外へ燦燦たる弥生のおどる光踏みしむ

山野幸司

休校

雑祭りななことさくら遊び終えこたつに眠る夢見る小鹿
 休校の宿題追われ飽く部屋に孤紙飛行機に夢乗せ遊ぶ
 フラフープ一日回すわが孫の長き休暇に背文伸びいん
 カカ笑い相槌の孫声だけが部屋に満ちたりわが耳遠し
 休みなく歩き回りし孫達の声にメジロ立ち飛び回る
 保育園わが胸欄み別れ泣く孫声残る車の中に
 足し算の「五ちゃん二ちゃんんで？」得意顔孫と妻との会話春だよ

横田 敏子

九年目の三月

・福

父も母も津波にさらわれ残されし少女のおりて祖母と暮らしき涙さえ津波がさらいて行きたるや涙を見せぬ女の子でありぬあの日から九年目の春かの少女 乙女となりていかにかおらんコロナウイルスのマスク姿に甦る原発事故に怖えしかの日日を追いて増えゆくコロナ感染者先が見えないマスクが足りぬ東日本大震災の追悼式中止、縮小、感染予防と原発の避難区域の駅周りに除染して常磐線の全線開通

吉永 惟昭

眠剂

・熊

眠剂は遙か浮きくる想い出か果す幻夢に拡がる嘘まじる告白だったあの頃をあざ嚙うかに鶯の啼く

三月の末にはかならずやって来た とうとう本当になる「忘れ雪」姫迎う火振りの神事燃え怒る藁の火の音二人で聞いた夜

大丈夫在庫ありますとこのこと棚は「売り切れ」マスク・ペーパー 僅かだから勝ったパチンコ棉路に拘う好事魔多し好事魔多しと処するべき情報何もなきがまただ籠り居のコロナ・ウイルス

久我 田鶴子

七坂

・羊

七坂をふたたび巡る大阪に関子さんゐない 亡き人を呼ぶ乾びたる実の三つ四つを下ぐるのみ坂の上なる藁に会へり 愛染坂くだりゆくときはばらり来る晴れたる空の気まぐれ雨が 清水の音羽の滝に摸したるもひかり筋なし香たむけしむ

西方に沈む夕日をまぼろしに四天王寺を見返りもせず

種袋たくさん並ぶも苗ものにアスパラガスのあるも見て過ぐにうめん小盛りの赤飯団子までいかに大阪なんだかどうか

現代歌人協会主催 朝日新聞社後援

第49回 全国短歌大会

開催日時 二〇二〇年十月二十五日(日)

会場 学士会館 東京都千代田区神田錦町三二二十八
 沖ななも・奥田亡羊・川野里子・栗木京子・
 小島なほ・斉藤斎藤・笹公人・佐藤弓生

選者 林和清・御供平信

賞 全国短歌大会賞・朝日新聞社賞

学生短歌賞・選者賞

入選発表・入選歌批評・授賞式

特別選評 奥田亡羊×小島なほ

※入賞作品は朝日新聞・短歌雑誌にも掲載されます！

◆ 作品応募要領 ◆

作品 新作五首以内(何組でも可 未発表作品に限る)
 参加料 一組 三千元(学生は二千元)

送里方 ※学生は小学校から大学(専門学校を含む)まで。
 B4判の用紙(四百字詰原稿用紙も)に作品を書き、
 右の欄外に郵便番号・住所・氏名・年齢(学生は学
 校名)・電話番号を明記。

送里先 ※応募は、現金書留または郵便為替を同封。もしくは
 郵便振替により送金(振替口座 00902-1-0091
 必ず受領証の写しを同封してください。)郵便切手
 は不可とします。

送里先

〒170-0003 豊島区駒込一―三十五―四―五〇二

締切 現代歌人協会 全国短歌大会事務局あて
 二〇二〇年六月三〇日 当日消印有効

香川師と米田雄郎

佐久間 晟

わが家には、晩年の香川師から贈られた「ねもころに雀遊ばせ居る母よ寒のひびきの四方にたつなか」の半折を屏風にして飾っている。『甲虫村落』の中の一首である。この歌の原作は「母は居る」の愛想の無い表現なのである。

香川師は、生地高松の中学から、高専を受験した時、当時三流と言われた現地の高松高専は不合格で、超一流と言われた対岸の神戸高専が合格であったという。ここらあたりにも師の逆境に強い運勢があったのかも知れない。

そして神戸に下宿した師は、「詩歌」の先輩嘉納とわが居ることを知り、習いに通ったとのこと。何日かするうち、師の徒ではない才能を知った嘉納とわは、その先輩の近江大津の米田雄郎を紹介した。師は真面目に神戸から大津まで通ったそう。性格の似た二人は意気投合し、やがては米田家の子息と師の姉の子を結ばせる一族の間柄にもなった由。そこで歌への影響も大変な感化が見られる。

先に掲げた歌の原作「母は居る」の無感情の表現、しかしこの断絶したような表現の空間に起こる感情の広さ・大きさが将に師の独壇場とも言える表現であり、米田雄郎の表現でもあったろうに。それが、今は、「居る母よ」の母独りの狭い感情に変わったのである。歳の所為かとも言えそうな可憐な感情である。やはり「母は居る」の断絶した空間の叙情が師の本領ではなかったのかと私は思っているし、それが師の魅力でもあったろうに。

(付記、この「母」とは、当時師宅に同居していた、美智子夫人の御母堂「尾松静子」様のことです。)

香川進の生きものの歌

19

土土 成彦

・きよらなる月のおもてをたもつべくしずかに草もひつじも
ねむる
『甲虫村落』の「タンゲルウッド」より

羊の連想としてあまり日本の田園風景は思い浮かばない。どうしてもキリスト教世界の聖書関連が連想される。パッハのカンタータの一節だとか賛美歌も思い起こされる。場所はオーストラリアの都市部ではなく田園地帯なのだろう。素材で敬虔なクリスチャンを彷彿とさせる歌の中にこの作も入っている。

月のおもてと草原の羊とは物理的に考えればいかような因果関係も成立しないだろうが、上句はメタファーとして何かを表しているのだと思う。例えば、この地一体に生活する人々の環境だとか、あるいは作者本人の魂だとか、それは読むものの読み取り方に委ねられているのだろう。草も羊も目覚めて活動を始めればその清らかさは破られてしまうものなのかも知れない。作者壮年の疲れを知らないバイタリティー溢れる姿を思い浮かべると、この歌の持つ静謐な魅力は少し異質なようにも感じる。

また、この歌は全体ひらがな表記が多い。漢字は「月」と「草」だけで柔らかな調べを醸し出している。目で読むというより声を出して詠むという感じの歌だと思ふ。歌の表記は何でも知ってる漢字を全部使うというようなものではなさそうだ。

今日の二人

宮参り

川上 悠子

四人目の曾孫「はじめ」の宮参り雪を蹴りつつ東京へ発つ

その鼻梁誰に似るやと六時間半の車中に思ひ描きぬ

はるばると出で来し我に孫言へり「小さくなつたねでも元氣さう」

鋼のごとくあれと亡き夫のつけし名の「鋼太」が出迎ふ玄関先に

孫に残る因幡訛りの心地よし白衣のままにわれを労ふ

ウィルスは持ちこむなと医師面に手洗ひ嗽を孫は促す

三千グラムに生まれこれがわが曾孫壊れもののごとく吾が胸に来る

抱けるは生きて蠢く人形か顔は夫に似てよく笑ふなり

壊れもの扱ふごとく乳母車に恐れつつ押す蒲公英の道

三キロといへども八十六歳の吾が胸にずしりと重し野の道に立つ

子孫曾孫代々譲りの宮参着着て笑める「はじめ」よ強く生き抜け

ナフタリン匂ふその親の古着きて笑める曾孫よ時代を越えよ

親子孫八人の肉親に添はれつつ大国神社の梅が香に立つ

歌は終生の伴侶

私は今八十六歳。岡山県と鳥取県の県境の地に独りで住み、時々子や孫の住む東京や鳥取、香川の高松を訪ねるのを楽しみにしております。

先般、四人目の曾孫の宮参りに上京しました。夫は高校教師でしたが、六十歳の頃全盲となり、それからの私は眼となり、杖となりアッシーに終始しました。

夫は、瀬戸大橋開通記念の「盲人の歌」に入賞したのを機に、中島義雄先生に師事し、歌会に欠かさず出席するようになりました。

その講義を聞いていて、私も歌が詠めるのでは、と六十の手習いを始めました。

平成二十七年、夫が他界して独りとなった今では、私にとって短歌はかけがえのない伴侶となっています。

子も孫も仕事で忙しい日々です。会いたくなったらこちらから訪ねてゆくより仕方ありません。

昨年は、子や孫の応援を得て、笛吹川歌碑公園に夫を偲ぶ歌碑を建立しました。香川先生の歌碑と同じ公園です。

終生このふるさとに踏み止まって詠み続けていきたいと願っています。

今日の二人

南房総

酒井 治子

陽のかげる石段により見上ぐると梅檀の葉の細かく震ふ
 草引けば吾も大地に引張らる粘土^{へなつち}ゆゑに格闘しあひ
 雨上がりの朝を林に音止まず落ちつぐ雫の音にやあらむ
 穂の芽の出づれば摘まるる幹の先に液盛り上がる身を守らむと
 不動尊の奥処の滝の細ほそと木洩れ陽のなか白く落ちるる
 滝の上の流れせき止め村人は山の清水を家まで引きき
 かがまりてひたすら草引く夫の背は畑が好きと語りてをりぬ
 庭の隅白木蓮に寄りゆけばまぶしき白さに迎へくれたり
 紫陽花に野いばら深くからまるを五月の風に切り離したり
 村の家訪ぬれば路に鶏ら出でて来てのびのび風に触れをり
 山迫る闇夜に雨戸を閉ぢむ時向かうの家の明かり確かむ
 月の光ほのかに残るあかつきの村に一番鶏の声する
 窓の外紅葉の燃え初むる山わが家は宙に浮きゐるごとし

千葉と横浜

私が初めて短歌と出会ったのは四十五歳の頃です。長男を先天性の病気で亡くし、主人もひどく悲しんで気持が険悪になっていました。その頃母が「短歌というものがあるよ。」と教えてくれました。私は短歌に引かれました。自分の気持を思いのたけ表現したいというのが、最初の短歌との出会いでした。NHK短歌教室に通い、地域の短歌会に入り、教えていただきました。そして朝井恭子先生のおかげで「地中海」に入れていただきました。主人は定年後どうしても土を耕したいと、南房総に小さな家を建てました。その時から往復する生活が始まりました。岩井の家は南側に富山^{とみやま}という大きな山がどっしりと構えていて、西には東京湾の出口が見えます。ここに骨を埋めることになるのかなとほんやり考えたこともありま。それでも忙しく行ったり来たりしたのは、横浜の家に次男が一人で暮らしているからです。次男は給食のパンを製造する夜勤の仕事を頑張っていて、それを支えてやらなければという思いが強いのです。私は南房総に来て、大自然の中で癒されて来ました。拙いながら、自然を詠むことに喜びを感じています。

◆今月の二人・川上慈子作品評◆
壊れもののごとく吾が胸に

川上さんは、岡山県の津山市に在住。八十六歳になる現在も、子や孫の住む所を訪ねるのを楽しみにされているようだ。この度は、曾孫の宮参りに東京へ。

・四人目の曾孫「二」の宮参り雪を蹴りつつ東京へ発つ

曾孫の宮参りも四人目という。「雪を蹴りつつ」に、勇んで出かけていこうとする時の気持ちがよく表れている。

・鋼のごとくあれと亡き夫のつけし名の「綱太」が出迎ふ玄関先（せむぎ）

「二」の父である「綱太」。その名を付けた夫。その時に夫が籠めた願い。玄関先に出迎えてくれた孫の姿は、亡き夫を思い出させるものでもあったにちがいない。

・孫に残る因幡訛りの心地よし白衣のままにわれを労ふ

東京暮らしの中でも故郷訛りを留めている孫。因幡訛りと白衣。懐かしさと誇らしさが、そこに溢れる。その孫からはるばるやって来たことを労われては、嬉しさも極まったことだろう。

・三千グラムに生まれしこれがわが曾孫壊れもののごとく吾が胸に来る

初めて抱いた曾孫の感触を、「壊れもののごとく吾が胸に来る」と詠っている。生まれて、まだ柔々としている命を、全身で愛おしみ慈しんでいる作者である。

・ナフタリン匂ふその親の古着きて笑める曾孫よ時代を越えよ
孫から曾孫へと宮参りの着物が継がれる。「ナフタリン臭ふ」ではなく「匂ふ」であることに注目する。継がれてゆく血への、命への祝福。一身を賭けて今、川上さんがしていることである。

◆今月の二人・酒井治子作品評◆
梅檀の葉の細かく震ふ

評者・久我田鶴子

酒井さんは、横浜市在住。定年後どうしても地を耕したいという夫とともに南房総に家を建て、横浜から通っているという。

・陽のかげの石段により見上ぐると梅檀の葉の細かく震ふ
石段に日陰をつくっていたのは、梅檀の木だったのか。見上げてみると、梅檀の葉が細かく震えていたという。なにか懐かしいような情景だ。寛いだ時間が流れる。

・雨上がり朝の朝を林に音止まず落ちつぐ響の音にやあらむ
雨上がりの朝。雨は止んだのに林に音がつついている。それが、木についた響が落ち続けている音であるらしいと気づいた

ときの作者の気持ち。一緒に耳を澄ましたくなる。

・不動尊の奥処の滝の細ほそと木洩れ陽のなか白く落ちる
細い滝ではあるけれど、不動尊が祀られているということとは、

村の暮らしに長く関わりがあることの証である。そういうことも、南房総に行つて知らされたことだったにちがいない。

・かがまりてひたすら草引く夫の背は畑が好きと語りてをりぬ
何も言わなくても、畑にかがまって草を引いている夫の背中

を見れば、その気持ちはよく分かる。と、この歌は、畑の夫を見つめている妻の思いを語っている。

・村の家訪ぬれば路に鶏ら出でて来てのびのび風に触れをり
村の人たちとのつき合いも始まっているのだろう。村の家を

訪ねてみると、路にまで鶏たちが出て来て、のびのびと風に触

れているという。鶏も放し飼いなんでしょう。風の中を自由に歩

きまわっている鶏の姿にも、横浜では味わえないものをたっぷり

私と短歌との直接の出会いには区のカルチャー教室で、平成二十四年に俳句の講座を受けたことがきっかけでした。

私の住む江戸川区には熟年者のためのカルチャー教室があります。文芸・手工芸・書・絵画・語学・音楽・園芸等多岐にわたって三十科目八十四教室があり、ちなみにこの年の受講者は二千三百九十四人でした。熟年者の生きがいづくりのきっかけの場として長年運営されています。

私も興味のおもむくままに毎年色々々と受講し楽しんでいますが、この俳句の講座では句会を通して、言葉の広さや深さ、豊かさを改めて感じました。一年間の講座が終わろうとしていた頃、教室の仲間の一人から歌会への誘いを受けました。区内の短歌グループ「虹の会」です。平成二十五年三月短歌の入口に立ちました。

「虹の会」は平成十四年に発足した会で、節目には記念歌集を発行し、会員の皆が毎月一回の歌会、年数回の吟行会、ミニ茶会付きの新年会等を楽しみながら、大切にしている会です。初めて参加した日は、講師の中島史子先生の的確な指摘や添削に目を見張る思いをしたことを今でも覚えていますが。和やかな中にも真摯な雰囲気は今も変わらず現在に至っています。

「虹の会」に参加して半年が過ぎた頃、中島先生から「地中海」の「森の会」の船堀歌会に誘っていただきました。平成二十五年十月、歌会の会場が自宅から近いこともあって気軽に参加しました。辛口の批評も飛び交う三時間半の歌会に圧倒されましたが、ずっと引き込まれていきました。三日目の十二月の歌会の日の日記には「真剣



勝負のように面白い」と記しています。「歌会には先生はいないのよ。平等に批評し合いましょ。」と磯田ひさ子さんの明るく力強い言葉かけに、自由な発言が行き交います。吟行会も楽しく、おいしく（食事）充実の会となって大変勉強になります。実際に作歌をしていくと、短歌の面白さと同時に難しさを痛感し、歌会の出席と並

行して区の短歌連盟の主催する四回の初心者講座やカルチャー教室の短歌講座に通うなど遅きながら勉強を始めました。

ちょうどその頃、父の遠距離介護が始まり、東京と島根を往復することとなり、平成二十六年十月に父を見送りました。胸中のさまざまな思いを歌にすることで、まさに短歌に救われたと思いました。介護の日々の中で、父の姿や寄り添う母の姿も歌に残すことで一層鮮やかに心に残ったように感じます。出棺の折、庭の石菫の黄の花がともに見送ってくれていると感じ、歌に詠んでから石菫は特別な花になりました。

短歌を作り始めてから、中学の国語の教員の頃、教科書の和歌や短歌を生徒と学習したことがしきりに思い出されます。百人一首大会や、俳句、短歌を課題で作ったことなどをいつか思い出して人生のどこかで楽しんでくれたらと思うこの頃です。

さて、私の生まれた石見は柿本人麻呂の終焉の地と言われ、育った松江は「八雲立つ出雲八重垣」で知られる八重垣神社があり、短歌に出会うずっと前から深い縁があったのでしょか。そんな私を短歌の世界に導き、支えてくださった方々との出会いに深く感謝を申し上げ、今後もこの縁を大切にしていきたいと思っています。